

# 平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

平成28年3月15日

**農林水産省**

## 北海道

### 1 近年の10a当たり収量の動向

近年の10a当たり収量の動向をみると、平成23年以降、高めで推移し、上昇傾向にある。(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄(平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	○	××	××	89
22	××	◎	×	98
23	××	◎	○	105
24	○	—	◎	107
25	×	◎	○	105
26	○	—	◎	107
27	×	◎	○	104

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、—：平年並み  
×：やや不良(やや少ない)、××：不良(少ない)

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み  
×：やや多い ××：多い

なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅(北海道は1.85mm)以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

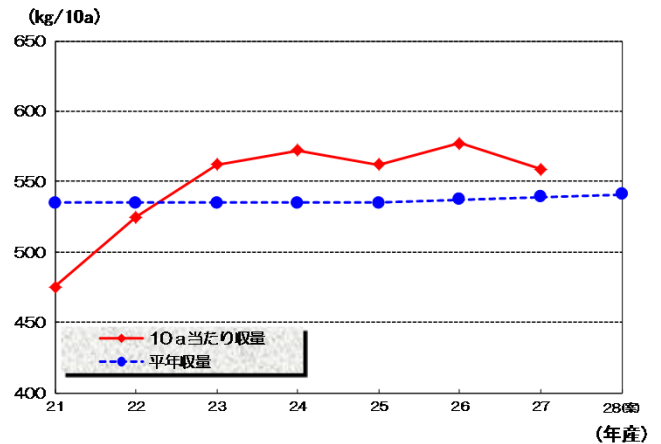
### 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「きらら397」等が減少し「ななつぼし」、「ゆめぴりか」等が増加する傾向にある。

また、今後、業務用に特化した高収量品種である「そらゆき」、農薬を節減かつ収量が高い「きたくりん」の作付増加が予想される。(図2表3)

なお、各品種別の収量水準の変動は少ないものの、10a当たり収量試算値の対前年差では上昇傾向となっている。(表3)

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準等



北海道	21	22	23	24	25	26	27	28(推)
10a当たり収量	475	525	562	572	562	577	569	
平年収量	535	535	535	535	535	537	539	541
平年収量の前年差	1	0	0	0	0	2	2	2

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
北海道	539	556	17	565	566

図2 品種別作付面積割合の動向

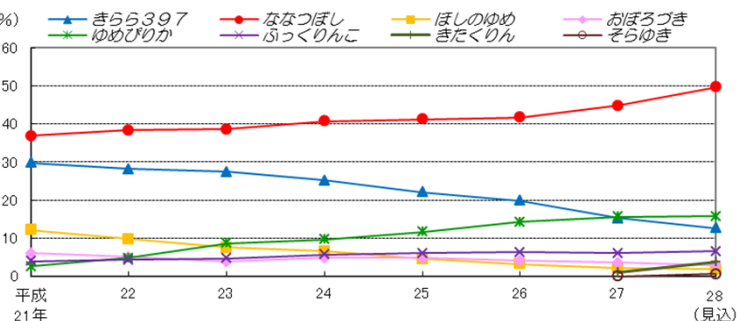


表3 品種別作付動向による10a当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
ななつぼし	584	38.6	40.8	41.2	41.8	44.9	49.7
きらら397	597	27.4	25.2	22.1	19.9	15.2	12.6
ゆめぴりか	561	8.7	9.7	11.6	14.2	15.6	15.7
ほしのゆめ	564	7.6	6.5	4.6	3.2	2.2	1.8
おぼろづき	554	3.8	4.8	4.8	4.1	3.6	2.9
ふっくりんこ	565	4.7	5.7	6.0	6.3	6.1	6.5
きたくりん	591	—	—	—	—	1.1	3.8
そらゆき	646	—	—	—	—	0.0	0.6
*はくちょうもち	556	2.8	2.5	2.5	2.6	2.2	1.9
*きたゆきもち	554	1.3	1.6	1.7	1.7	1.7	1.6
*風の子もち	582	2.9	2.5	2.6	2.8	2.7	2.4
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)							0.8

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

なお、「きたくりん」、「そらゆき」は農業団体等の情報から推計した。

2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 3 主食米等の作付動向

地帯別作付面積割合の動向をみると、空知、上川等の主産地で変動は少なく、収量水準に与える大きな影響はない。（表4）

表4 地帯別作付面積割合の動向

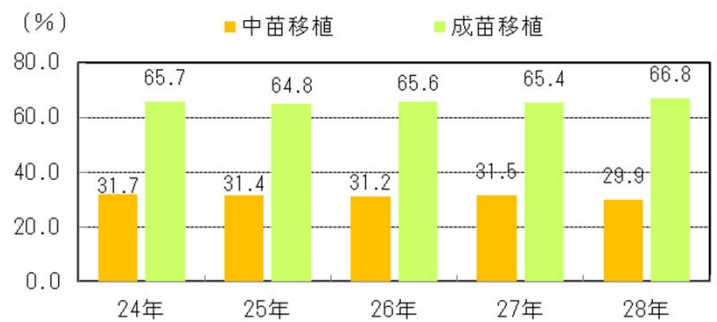
地域（地帯）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
石狩	548	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9
南空知	556	20.2	20.1	19.9	19.7	19.1	19.3
北空知	584	25.5	25.5	25.6	25.3	25.4	25.3
上川	589	26.9	26.9	26.9	27.3	28.1	28.1
留萌	532	4.0	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1
渡島	506	2.6	2.7	2.7	2.8	2.8	2.7
檜山	521	3.7	3.7	3.7	3.8	3.7	3.7
後志	538	4.3	4.4	4.4	4.4	4.3	4.3
胆振	513	3.3	3.3	3.4	3.3	3.3	3.2
日高	502	1.5	1.4	1.4	1.4	1.3	1.4
オホーツク・十勝	485	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
10a 当たり収量試算値の対前年差 (kg)							0.0

資料：水稲作況調査結果等  
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5年平均である。  
2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 4 栽培技術等の動向

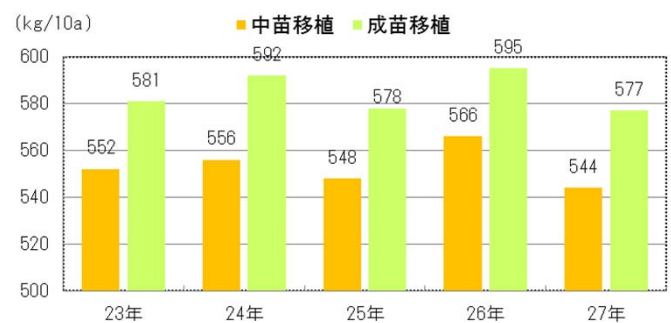
栽培技術等の動向をみると、近年、中苗移植等から収量水準の高い成苗移植に移行し、安定した栽培が確立されつつある。（図3及び4）

図3 移植方法別作付面積割合の動向



注：関係団体等の資料を基に推計した結果である。（見込み）

図4 移植方法別収量水準の動向

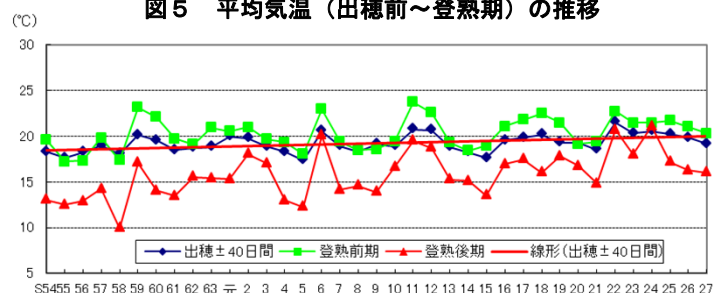


注：水稲作況調査結果より作成した。

### 5 収量水準の動向

- ①近年の10a 当たり収量の動向をみると、平成23年以降、高めで推移し、上昇傾向にあること、
  - ②収量水準の高い「ななつぼし」、「ゆめぴりか」等の作付面積割合が増加していること、
  - ③成苗移植等高収量で安定的に生産する栽培技術が普及していること、
  - ④近年の登熟期間における平均気温が安定していること（図5）、
- 等から、収量水準は上昇傾向にある。

図5 平均気温（出穂前～登熟期）の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

## 青 森

### 1 近年の10a 当たり収量の動向

近年の10a 当たり収量の動向を見ると、平成22年を除き、高めで推移し、上昇傾向にある。(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄 (平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	—	—	—	101
22	××	◎	—	100
23	×	◎	○	103
24	—	◎	◎	106
25	○	—	○	104
26	◎	×	○	104
27	—	○	○	105

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平常並み  
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平常並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（青森は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

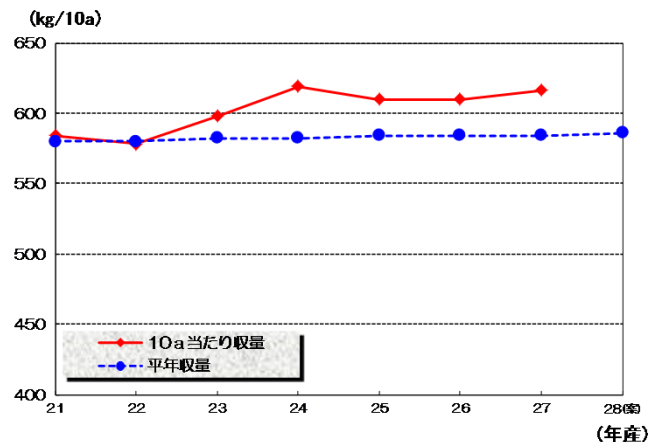
### 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「つがるロマン」、「まっしぐら」で96%を占めている。

なお、平成27年産から収量水準は低いが良食味・高品質でさらに生産・出荷を適性に管理した新しいブランド米である「青天の霹靂」の作付けが開始されたものの、平成28年産は全体の3%程度と見込まれる。

(図2及び表3)

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準



青 森	21	22	23	24	25	26	27	28(推)
10a 当たり収量	584	578	598	619	610	610	616	
平年収量	580	580	582	582	584	584	584	586
平年収量の前年差	0	0	2	0	2	0	0	2

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参 考)	
				5中3 平均	5か年 平均
青 森	584	604	20	612	611

単位：kg

図2 品種別作付面積割合の動向

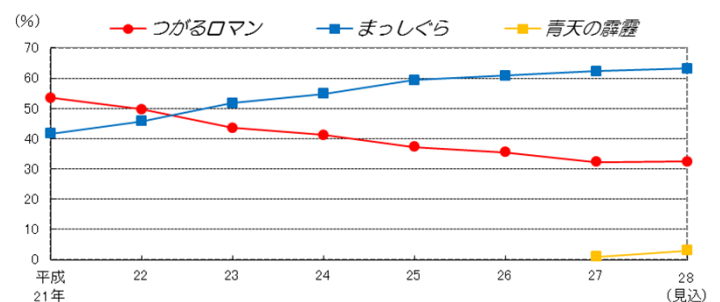


表3 品種別作付動向による10a 当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)						
		H23	24	25	26	27	28 (見込)	
つがるロマン	604	43.6	41.2	37.3	35.5	32.3	32.5	
まっしぐら	601	51.8	54.8	59.3	60.8	62.3	63.2	
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)						△ 0.1	△ 0.1	0.0

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 3 主食用米等作付の動向

地帯別作付面積割合を見ると、収量水準の高い津軽地帯が増加傾向、収量水準の低い南部・下北地帯はやや減少傾向となっている。（表4）

青森県では主食用米から、飼料用米に大きく転換を進め、平成27年産では約4,400ha増加し（表5）、特に収量水準の低い青森及び南部・下北地帯の割合が増加し、平成28年も同じ傾向が続くことから、主食用米の県全体の収量が増加すると見込まれる。

表4 地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
青森	590	10.8	10.9	11.1	10.9	11.0	10.7
津軽	627	59.3	59.7	59.1	59.6	61.8	61.4
南部・下北	566	29.9	29.4	29.8	29.5	27.2	27.9
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)				0.3	1.4	△ 0.3	

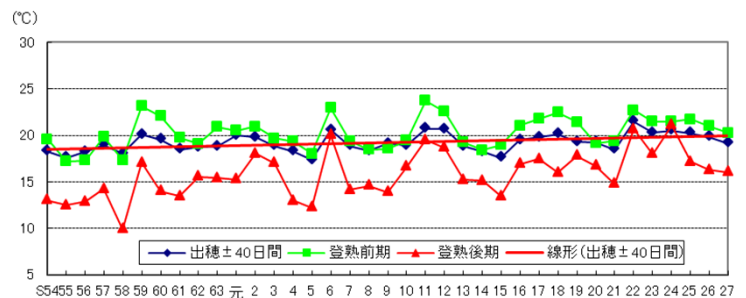
資料：水稻作況調査結果等  
 注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

表5 飼料用米作付面積等の動向

年産	面積 (ha)	数量 (t)	(参考)
			飼料用米 作付率 (%)
平成27年	7,211	41,130	14.2
26年	2,812	15,883	5.5
前年差	4,399	25,247	

資料：農林水産省調べ

図3 平均気温（出穂前～登熟期）の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

### 4 収量水準の動向

- ①近年の10a 当たり収量の動向を見ると、平成22年を除き、高めに推移し、上昇傾向にあること、
  - ②収量水準の低い青森及び南部・下北地帯の作付割合が減少していること、
  - ③近年の登熟期間における平均気温が安定していること（図3）、
- 等から、収量水準は上昇傾向にある。

# 岩手

## 1 近年の10a 当たり収量の動向

近年の10a 当たり収量の動向をみると、平成22年以降、高めで推移し、上昇傾向にある。(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄(平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	×	○	—	100
22	—	○	○	104
23	—	○	○	102
24	—	○	○	105
25	○	—	○	102
26	◎	×	○	105
27	—	○	○	105

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、—：平年並み

×：やや不良(やや少ない)、××：不良(少ない)

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み

×：やや多い ××：多い

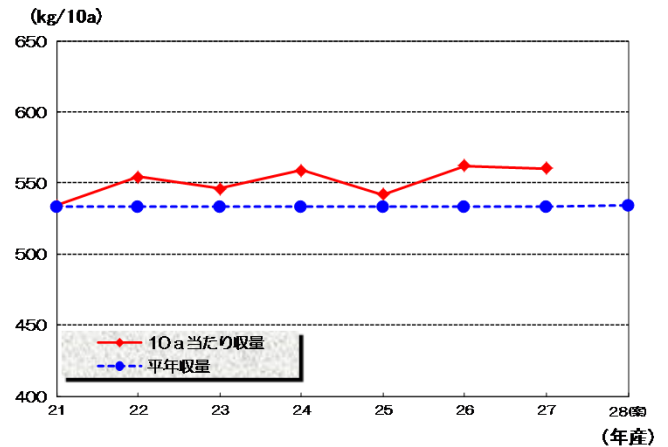
なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅(岩手は1.85mm)以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

## 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「ひとめぼれ」、「あきたこまち」で86%を占めている。

比較的収量水準の高い「ひとめぼれ」が増加傾向にある。(図2及び表3)

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量水準



岩手	21	22	23	24	25	26	27	28(推)
10a 当たり収量	534	554	546	559	542	562	560	
平年収量	533	533	533	533	533	533	533	534
平年収量の前年差	0	0	0	0	0	0	0	1

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
岩手	533	552	19	555	554

単位：kg

図2 品種別作付面積割合の動向

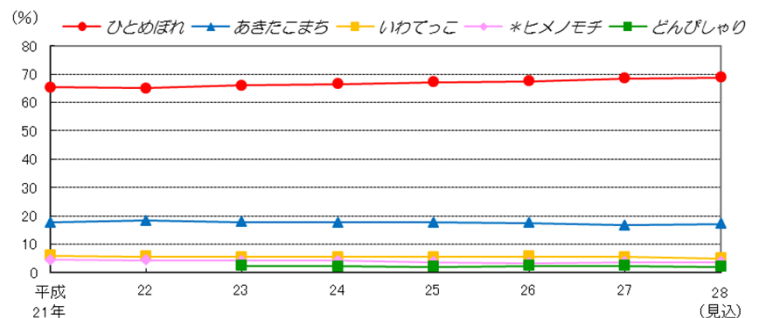


表3 品種別作付動向による10a 当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
ひとめぼれ	551	66.0	66.5	67.2	67.5	68.4	68.8
あきたこまち	555	17.8	17.6	17.7	17.5	16.7	17.1
いわてっこ	539	5.5	5.5	5.5	5.6	5.4	5.0
どんびしゃり	613	2.3	2.1	2.0	2.4	2.3	2.0
*ヒメノモチ	554	4.2	4.2	3.6	3.3	3.6	3.7
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)			△ 0.1	0.0	0.2	0.0	△ 0.1

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 3 主食用米等作付の動向

地帯別作付面積割合の動向を見ると、比較的収量水準の高い北上川下流地帯が増加傾向にある。

一方、東日本大震災後、収量水準の低い被害のあった沿岸部（東部・北部）は復旧が進みつつあるものの、平成28年見込と比べて、他の地帯より減少が激しい。（表4）

表4 地帯別作付面積割合の動向

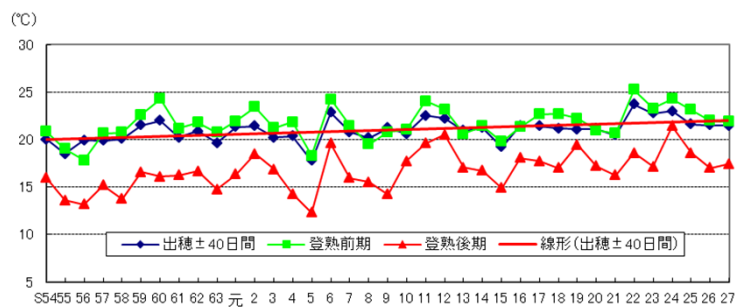
地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)						
		H22	23	24	25	26	27	28 (見込)
北上川上流	574	24.5	24.6	24.4	24.9	24.5	23.6	23.7
北上川下流	550	67.0	67.7	68.0	67.5	68.1	69.4	69.3
東部	494	3.1	2.6	2.5	2.5	2.7	2.7	2.7
北部	513	5.4	5.1	5.1	5.1	4.7	4.3	4.3
単収試算値の対前年差(kg)			0.5	0.0	0.1	△ 0.1	△ 0.1	0.0

資料：水稲作況調査結果等による。  
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 4 収量水準の動向

- ①近年の10 a 当たり収量の動向をみると、平成22年以降、高めで推移し、上昇傾向にあること、
  - ②東日本大震災後、収量水準の低い東部・北部の作付割合が減少していること、
  - ③近年の登熟期間における平均気温が安定していること（図3）、
- 等から、収量水準は上昇傾向にある。

図3 平均気温（出穂前～登熟期）の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

## 宮 城

### 1 近年の10a 当たり収量の動向

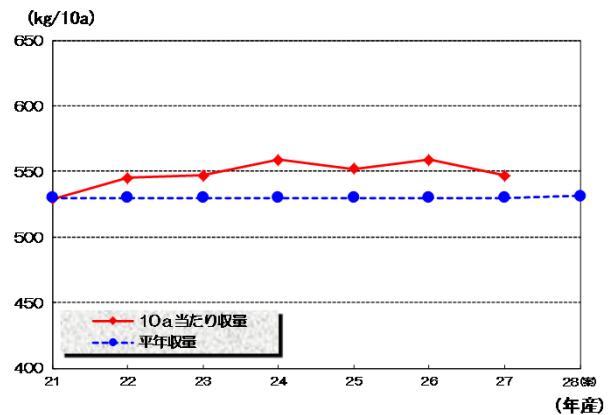
近年の10a 当たり収量の動向をみると、平成22年以降、高めで推移し、上昇傾向にある。(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄 (平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)数
21	—	—	—	100
22	×	○	○	103
23	○	—	○	103
24	—	○	○	105
25	○	—	○	104
26	◎	×	○	105
27	○	×	○	103

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平常並み  
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平常並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（宮城は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準



宮 城	21	22	23	24	25	26	27	28(見込)
10a 当たり収量	529	545	547	559	552	559	547	
平年収量	530	530	530	530	530	530	530	531
平年収量の前年差	0	0	0	0	0	0	0	1

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参 考)	
				5中3 平均	5か年 平均
宮 城	530	550	20	553	553

単位：kg

### 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「ひとめぼれ」が約8割を占めている。

また、収量水準の高い「つや姫」が増加傾向にある。(図2及び表3)

図2 品種別作付面積割合の動向

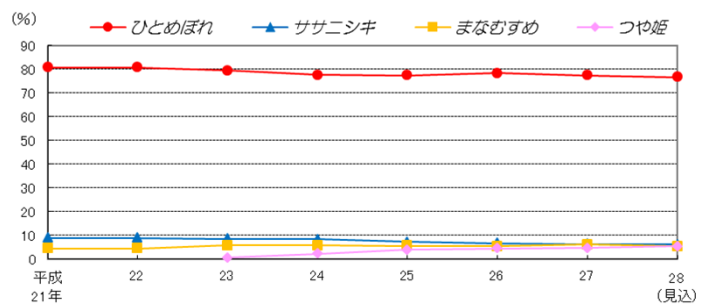


表3 品種別作付動向による10a 当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
ひとめぼれ	561	79.5	77.5	77.4	78.3	77.4	76.7
ササニシキ	577	8.5	8.4	7.3	6.7	6.3	6.1
まなむすめ	576	5.7	5.8	5.5	5.3	6.2	5.3
コシヒカリ	504	1.6	1.5	1.5	1.3	1.3	1.2
つや姫	578	0.5	2.3	3.9	4.5	4.7	5.4
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.4	0.1	0.1	0.1	0.0

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。



### 3 地帯別作付面積割合等の動向

地帯別作付面積割合の動向を見ると、東日本大震災後の影響を踏まえ、これまで作付けが安定するまで平年収量を据置きしていたが、沿岸部（特に中部）は復旧が進み、震災以前まで回復しつつある。（表4）

表4 地帯別作付面積割合の動向

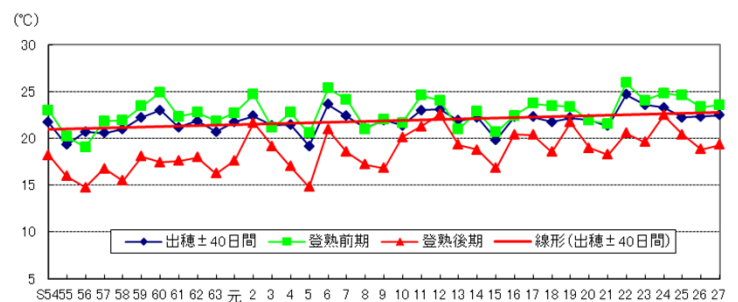
地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)						
		H22	23	24	25	26	27	28 (見込)
南部	526	10.4	11.4	10.6	10.5	10.5	10.6	10.6
中部	533	19.4	13.5	16.5	17.6	17.5	17.7	18.6
北部	558	57.8	64.0	61.2	60.2	60.1	60.0	58.9
東部	555	12.4	11.0	11.6	11.7	11.8	11.7	11.8
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)			1.2	△ 0.5	△ 0.2		△ 0.1	△ 0.2

資料：水稻作況調査結果等  
 注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 4 収量水準の動向

- ①近年の10a 当たり収量の動向をみると、平成22年以降、高めで推移し、上昇傾向にあること、
  - ②比較的収量水準の高い「つや姫」の作付面積割合が増加していること、
  - ③近年の登熟期間における平均気温が安定していること（図3）、
- 等から、収量水準は上昇傾向にある。

図3 平均気温（出穂前～登熟期）の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

群馬

1 近年の10a当たり収量の動向

近年の10a当たり収量の動向をみると、平成22年を除き、順調に推移している。

(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄(平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	×	○	—	101
22	—	×	××	82
23	◎	×	—	101
24	○	○	○	103
25	○	○	○	103
26	○	×	—	101
27	○	××	—	98

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、—：平年並み

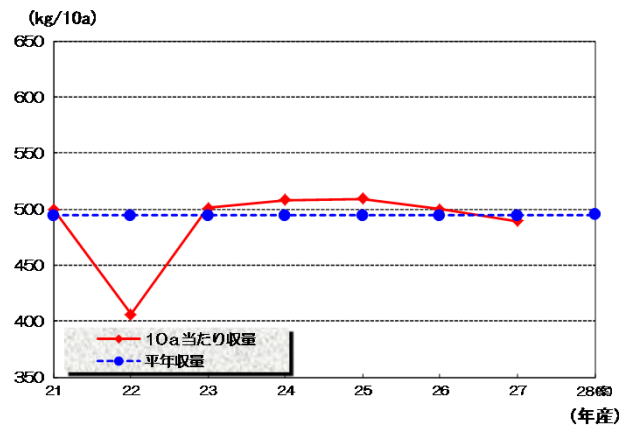
×：やや不良(やや少ない)、××：不良(少ない)

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み

×：やや多い ××：多い

なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅(群馬は1.80mm)以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



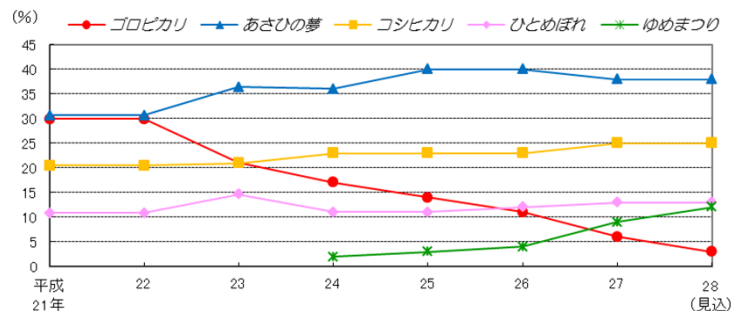
群馬	21	22	23	24	25	26	27	28(見込)
10a当たり収量	500	406	501	508	509	500	489	
平年収量	494	494	494	494	494	494	494	495
平年収量の前年差	0	0	0	0	0	0	0	1

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産平年収量 ①	7中5平均 ②	平年収量との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3平均	5か年平均
群馬	494	500	6	503	501

図2 品種別作付面積割合の動向



2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「あさひの夢」と「コシヒカリ」で約6割を占めている。

また、近年、収量水準の低い「ゴロピカリ」から、収量水準がかなり高い「ゆめまつり」への転換が進み、増加傾向にある。

(図2及び表3)

表3 品種別作付動向による10a当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28(見込)
あさひの夢	515	36.4	36.0	40.0	40.0	38.0	38.0
コシヒカリ	486	20.9	23.0	23.0	23.0	25.0	25.0
ゴロピカリ	485	21.0	17.0	14.0	11.0	6.0	3.0
ひとめぼれ	502	14.6	11.0	11.0	12.0	13.0	13.0
ゆめまつり	534		2.0	3.0	4.0	9.0	12.0
10a当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.9	1.5	0.9	2.0	1.6

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 3 地帯別作付面積の動向

地帯別作付面積割合の動向をみると、収量水準の低い中毛地帯の作付割合が減少傾向にある一方、収量水準の高い北毛及び東毛の作付割合が増加傾向にある。（表4）

表4 地帯別作付面積割合の動向

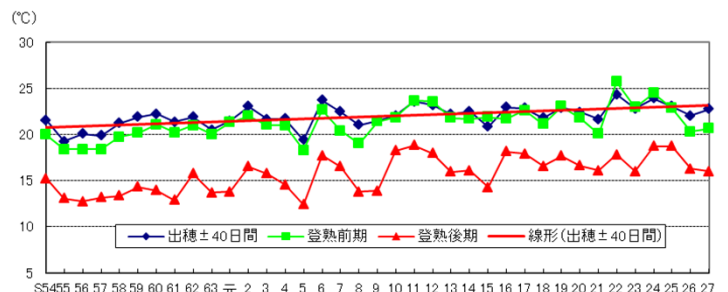
地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
中毛	488	47.2	46.5	45.7	45.1	43.8	43.7
北毛	525	11.0	10.8	10.9	11.0	11.9	12.1
東毛	506	41.8	42.7	43.4	43.9	44.3	44.2
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.1	0.2	0.1	0.4	0.1

資料：水稻作況調査結果等  
 注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 4 収量水準の動向

- ①近年の10a 当たり収量の動向をみると、平成22年を除き、順調に推移していること、
  - ②近年、収量水準の低い「ゴロピカリ」から、収量水準がかなり高い「ゆめまつり」への転換が進み、増加傾向にあること、
  - ③収量水準の高い地帯の作付割合が増加傾向にあること
- 等から、収量水準は上昇傾向にある。

図3 平均気温（出穂前～登熟期）の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

## 新潟

### 1 近年の10a当たり収量の動向

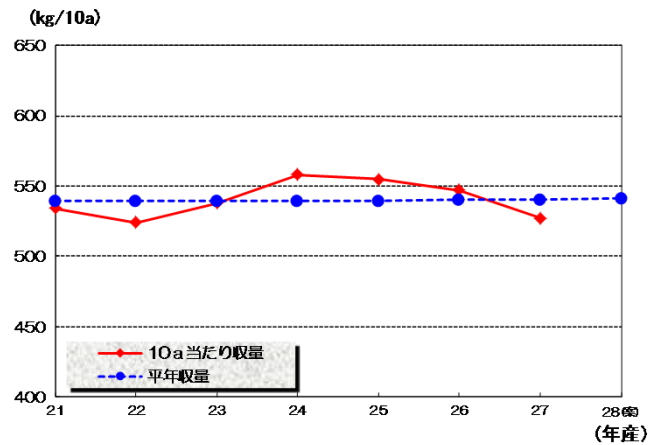
近年の10a当たり収量の動向をみると、比較的順調に推移している。(図1、表1、2)

表1 最近の作柄(平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	—	—	—	99
22	×	—	×	97
23	○	×	—	100
24	○	—	◎	104
25	○	—	○	103
26	○	×	○	101
27	—	×	×	97

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、—：平年並み  
 ×：やや不良(やや少ない)、××：不良(少ない)  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅(新潟は1.85mm)以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



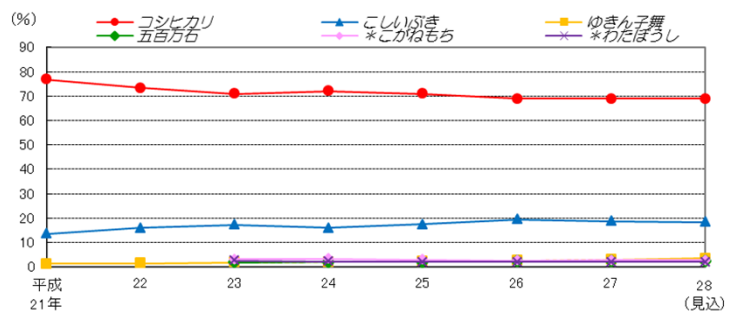
新潟	21	22	23	24	25	26	27	28(見込)
10a当たり収量	534	524	538	558	555	547	527	
平年収量	539	539	539	539	539	540	540	541
平年収量の前年差	0	0	0	0	0	1	0	1

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
新潟	540	540	0	547	545

図2 品種別作付面積割合の動向



### 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、主力品種の「コシヒカリ」が約7割を占めるものの、近年減少傾向にあり、一方、収量水準の高い「こしいぶき」「ゆきん子舞」が増加傾向にある。

なお、新品種「新之助」については、平成28年の作付けは100ha程度で、平成29年産以降では2,000ha程度まで拡大する予定となっている。(図2及び表3)

表3 品種別作付動向による10a当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
コシヒカリ	544	71.0	72.0	71.0	69.0	69.0	69.0
こしいぶき	598	17.3	16.0	17.5	19.5	18.8	18.3
ゆきん子舞	644	1.8	2.0	2.2	2.5	3.0	3.5
ゆきの精	588	0.5	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2
ひとめぼれ	604	0.4	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2
五百万石	554	1.9	2.0	2.0	2.2	2.3	2.3
*こがねもち	541	3.2	3.3	3.0	2.5	2.7	2.7
*わたぼうし	569	2.5	2.2	2.1	2.0	2.0	2.0
10a当たり収量試算値の対前年差(kg)						0.1	0.2

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 3 主食用米等作付の動向

地帯別作付面積割合の動向をみると、収量水準に大きな影響はない。(表4)

表4 地帯別作付面積割合の動向

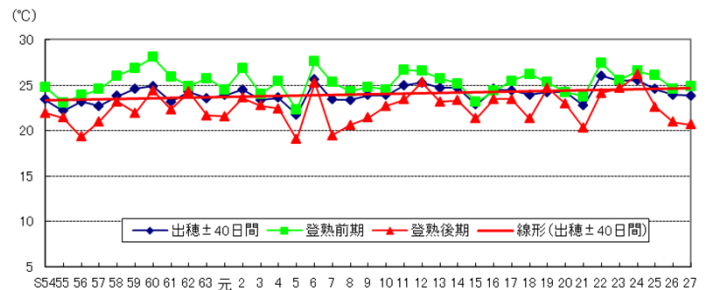
地帯(地域)名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
岩 船	538	5.4	5.4	5.3	5.4	5.3	5.3
下越北	548	14.2	14.2	14.4	14.6	14.5	14.4
下越南	565	28.6	28.8	28.6	28.6	28.7	28.5
中 越	534	21.2	21.2	21.4	21.3	21.5	21.5
魚 沼	516	13.1	12.8	12.8	12.7	12.9	13.1
上 越	520	12.4	12.5	12.3	12.3	12.1	12.2
佐 渡	527	5.1	5.1	5.2	5.1	5.0	5.0
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)						0.0	△ 0.1

資料：水稲作況調査結果等  
 注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 4 収量水準の動向

- ①近年の10a 当たり収量の動向をみると、比較的順調に推移していること、
- ②主力品種の「コシヒカリ」から、収量水準の高い「こしいぶき」及び「ゆきん子舞」への転換が進み、増加傾向にあること、
- 等から、収量水準は上昇傾向にある。

図3 平均気温(出穂前~登熟期)の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

# 富山

## 1 近年の10a 当たり収量の動向

近年の10a 当たり収量の動向をみると、比較的順調に推移している。

(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄 (平成21年産以降)

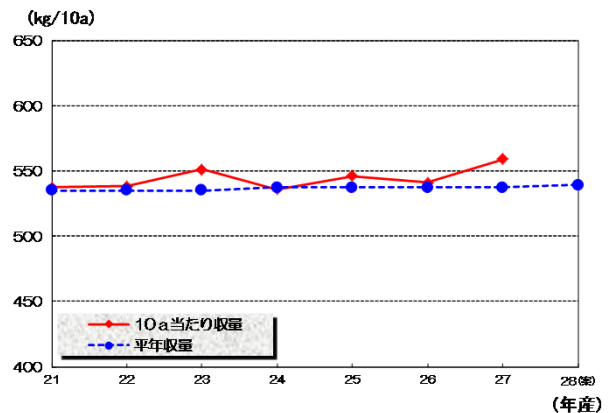
年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	○	×	○	100
22	—	×	○	101
23	○	—	◎	103
24	×	○	○	100
25	—	○	○	102
26	○	×	○	101
27	○	—	○	103

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み  
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（富山は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

## 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、主力品種の「コシカカリ」が約8割を占めているものの、「コシカカリ」偏重の是正から、高温登熟でも品質が安定している早生種の「てんたかく」、晩生種の「てんこもり」が増加傾向にある。（図2）

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準



富山	21	22	23	24	25	26	27	28(案)
10a 当たり収量	537	538	551	536	546	541	559	
平年収量	535	535	535	537	537	537	537	539
平年収量の前年差	0	0	0	2	0	0	0	2

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産平年収量	7中5平均	平年収量との差	(参考)	
				5中3平均	5か年平均
富山	① 537	② 543	③ = ② - ① 6	546	547

図2 品種別作付面積割合の動向

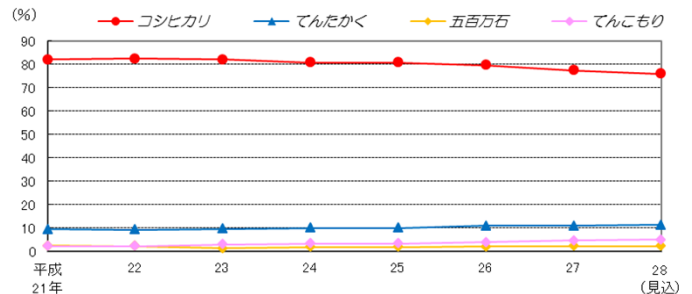


表3 品種別作付動向による10a 当たり収量水準の動向

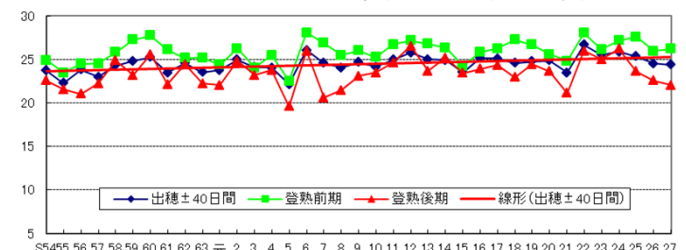
主な品種名	(参考) 10a 当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
コシカカリ	544	82.0	80.7	80.7	79.7	77.3	75.9
てんたかく	565	9.6	10.0	10.0	10.9	11.0	11.4
てんこもり	605	3.0	3.3	3.3	4.0	4.7	5.1
五百万石	531	1.4	1.9	1.9	2.0	2.2	2.3
10a 当たり収量試算値の対前年差 (kg)				0.0	0.6	0.5	0.4

資料：本稲作況調査結果等  
 注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

## 3 収量水準の動向

①近年の10a 当たり収量の動向をみると、比較的順調に推移していること、  
 ②主力品種の「コシカカリ」偏重の是正から、高温登熟でも品質が安定し、かつ、高収量である早生種の「てんたかく」、晩生種の「てんこもり」が増加傾向にあること、  
 から、収量水準は上昇傾向にある。

図3 平均気温 (出穂前～登熟期) の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

## 兵庫

### 1 近年の10a 当たり収量の動向

近年の10a 当たり収量の動向をみると、平成25年を除き、平年収量を下回っている。  
(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄 (平成21年産以降)

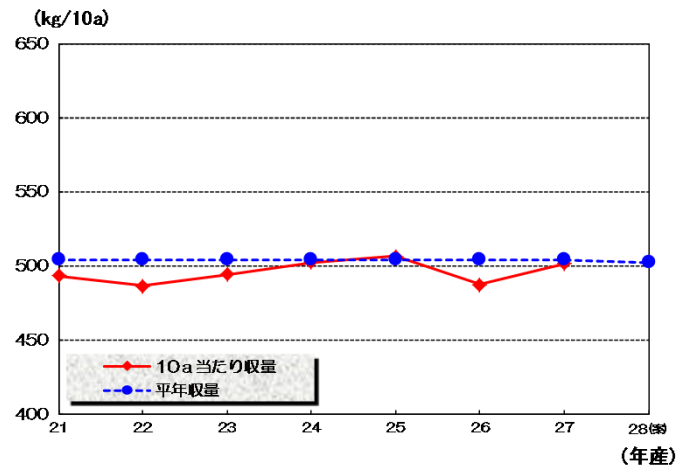
年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)数
21	×	—	×	98
22	×	—	×	96
23	×	—	×	98
24	×	○	—	100
25	○	×	×	100
26	×	—	×	97
27	—	—	—	99

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み  
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（兵庫は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

### 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、主力品種の「コシヒカリ」が約4割を占め、「キヌヒカリ」、「ヒノヒカリ」の3ヒカリで7割を占めているものの、それぞれ減少傾向にあり、その代わりに酒造好適米として、収量水準の低い「山田錦」が増加傾向にある。（図2及び表3）

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準



兵庫	21	22	23	24	25	26	27	28(推)
10a 当たり収量	493	486	494	502	506	487	501	495
平年収量	504	504	504	504	504	504	504	502
平年収量の前年差	0	0	0	0	0	0	0	-2

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
兵庫	504	495	△9	499	498

単位：kg

図2 品種別作付面積割合の動向

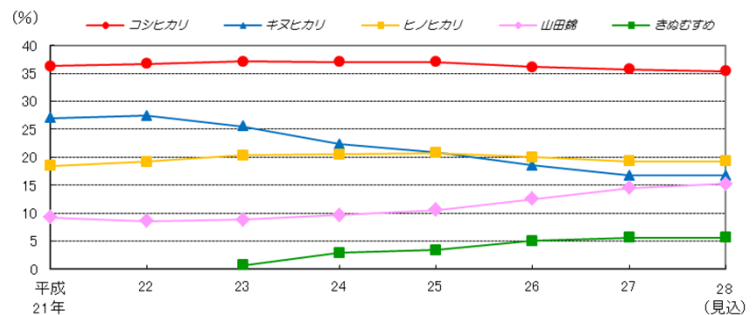


表3 品種別作付動向による10a 当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
コシヒカリ	483	37.1	37.0	37.0	36.1	35.7	35.4
キヌヒカリ	500	25.5	22.3	20.8	18.5	16.7	16.7
ヒノヒカリ	516	20.3	20.5	20.7	20.0	19.3	19.3
山田錦	481	8.7	9.6	10.5	12.5	14.5	15.2
きぬむすめ	538	0.7	2.9	3.4	5.0	5.6	5.6
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.8	0.1	0.3	△0.2	△0.1

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 3 地帯別作付面積割合等の動向

地帯別作付面積割合の動向をみると、比較的収量水準の低い県南が微増傾向にある。

(表4)

また、比較的収量水準の高い県北地帯（主に「コシヒカリ」）では収量水準の低い無農薬・減農薬米のコウノトリを育む農法による「コウノトリ米」（平成15年より開始）も増加傾向にある。（表5）

表4 地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
県南	495	73.9	74.1	74.2	74.4	74.8	74.8
県北	500	15.3	15.3	15.3	15.3	15.4	15.4
淡路	497	10.7	10.6	10.5	10.3	9.8	9.8
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)		△ 0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0

資料：水稲作況調査結果等  
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

表5 県北地帯のコウノトリ米の作付面積の動向

特別栽培米	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
コウノトリ米	477	0.7	0.7	0.8	0.9	1.2	1.3

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 4 栽培技術面の動向

栽培技術面の動向をみると、省力化・低コスト化を図る観点から、疎植栽培が増加傾向にあり、これに伴い1㎡当たり株数が減少傾向にあることから、1㎡当たり全もみ数は減少傾向にある。（図3及び4）

図3 1㎡当たり株数の推移

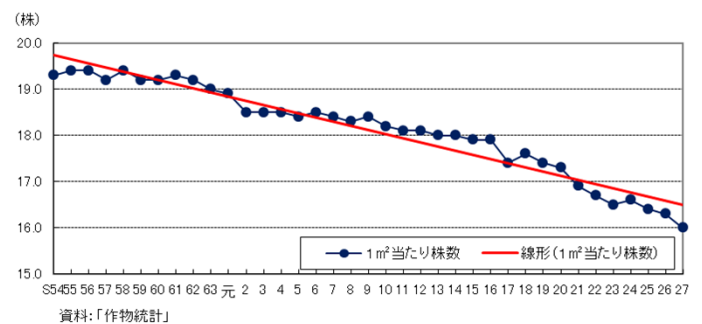
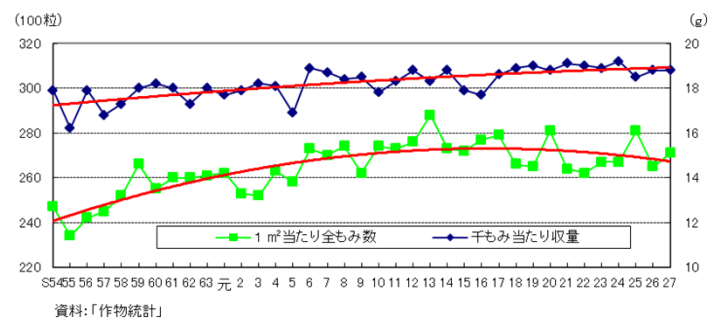


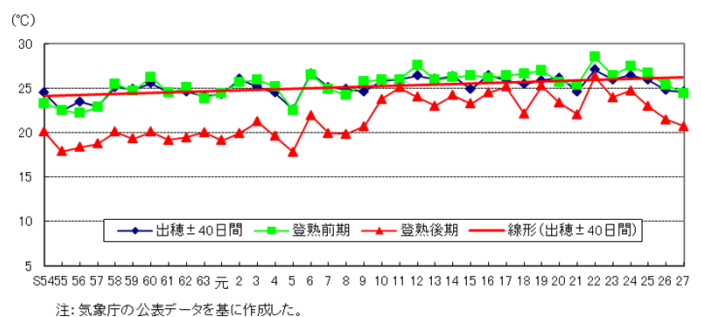
図4 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



### 5 収量水準の動向

①近年の10a 当たり収量の動向をみると、平成25年を除き、平年収量を下回っていること、  
②主力品種の「コシヒカリ」等が減少し、収量水準の低い「山田錦」が増加傾向にあること、  
③収量水準の低い県南地帯が増加傾向にあることに加え、収量水準の高い県北地帯でも収量水準の低い無農薬・減農薬米の「コウノトリ米」が増加傾向にあること、  
④省力化・低コスト化による疎植栽培が増加傾向にあり、これに伴う1㎡当たり株数の減少により、1㎡当たり全もみ数が減少傾向にあること、  
等から、収量水準は下降傾向にある。

図5 平均気温（出穂前～登熟期）の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。



# 高 知

## 1 近年の10a 当たり収量の動向

近年の10a 当たり収量の動向をみると、平成21年を除き、全て平年収量を下回っている。（図1、表1及び2）

表1 最近の作柄（平成21年産以降）

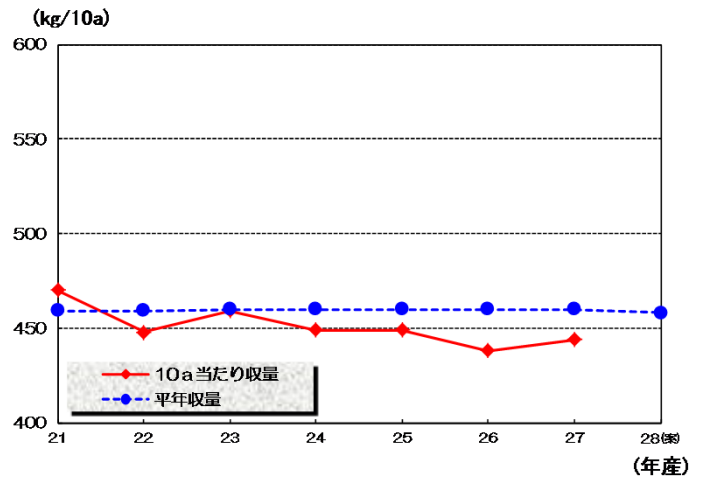
年次		全 も み 数	登 熟	被 害	（作 況 指 数）
21	早 期	○	—	○	103
	普通期	—	○	○	102
22	早 期	××	◎	×	98
	普通期	×	◎	×	97
23	早 期	×	—	×	97
	普通期	○	○	○	104
24	早 期	××	○	×	98
	普通期	×	×	×	97
25	早 期	××	○	×	98
	普通期	○	××	×	96
26	早 期	×	○	×	98
	普通期	××	×	××	91
27	早 期	—	×	×	96
	普通期	◎	××	×	97

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み  
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（高知は1.75mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

## 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、早期は「コシヒカリ」、普通期は「ヒノヒカリ」を中心とした品種構成で、近年、収量水準の高い「コシヒカリ」が減少傾向にある中、高温登熟に優れた「にこまる」が増加している。（図2及び表3）

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準



高 知	21	22	23	24	25	26	27	28(案)
10a 当たり収量	470	448	459	449	449	438	444	
平年収量	458	458	460	460	460	460	460	458
平年収量の前年差	0	0	1	0	0	0	0	-2

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参 考)	
				5中3 平均	5か年 平均
高 知	460	450	△ 10	447	448

図2 品種別作付面積割合の動向

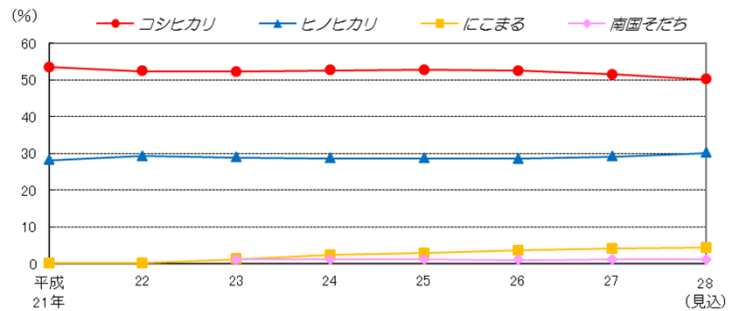


表3 品種別作付動向による10a 当たり収量水準の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
コシヒカリ	469	52.2	52.6	52.7	52.5	51.5	50.1
ヒノヒカリ	431	28.9	28.6	28.7	28.5	29.1	30.1
にこまる	456	1.3	2.4	2.9	3.6	4.1	4.3
黄金錦	341	2.4	2.1	1.7	1.6	1.5	1.4
南国そだち	489	1.1	1.1	1.1	1.0	1.1	1.1
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.5	0.4	0.1	△ 0.4	△ 0.4

資料：水稲作況調査結果等  
 注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 3 地帯別作付面積の動向

地帯別作付面積割合の動向をみると、収量水準に与える大きな影響はない。(表4)

表4 地帯別作付面積割合の動向

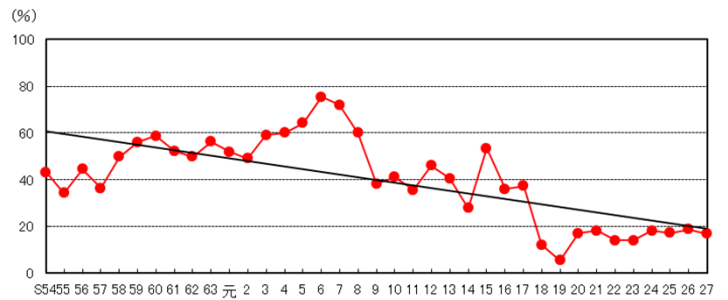
地帯(地域)名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
中東部	471	59.5	59.4	58.5	58.9	60.0	60.1
西部	418	40.5	40.6	41.5	41.1	40.0	39.9
10a当たり収量試算値の対前年差(kg)		△0.1	△0.5	0.2	0.6	0.1	

資料：水稲作況調査結果等  
 注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 4 1等米比率の動向

1等米比率の動向をみると、気候の変動に伴い、低下傾向にある。(図3及び4)

図3 1等米比率の推移

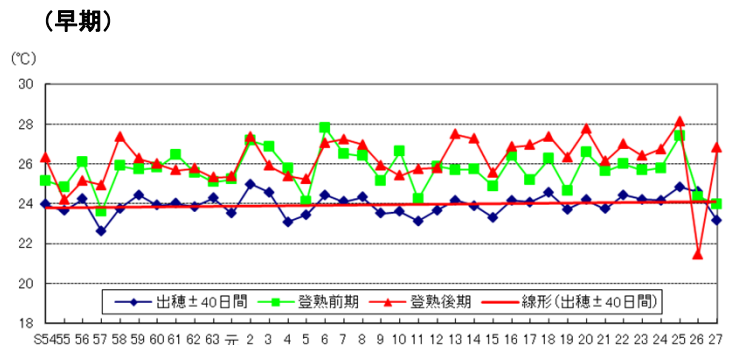


資料：農林水産省調べ

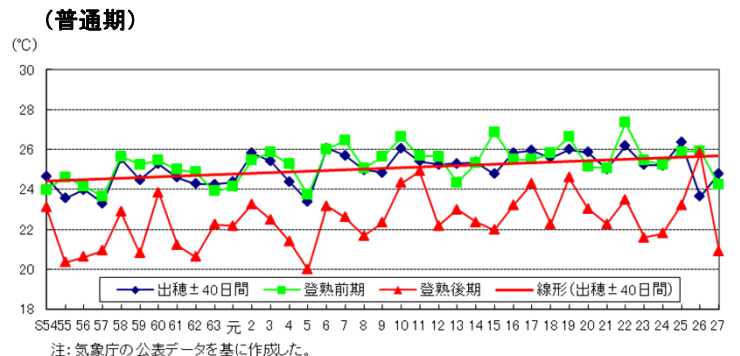
### 5 収量水準の動向

①近年の10a当たり収量の動向をみると、平成21年を除き、全て平年収量を下回っていること、  
 ②主力品種の「コシヒカリ」等が減少し、「コシヒカリ」に比べ、収量水準の低い「にこまる」が増加傾向にあること、  
 等から収量水準は下降傾向にある。

図4 平均気温(出穂前～登熟期)の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。



注：気象庁の公表データを基に作成した。

## 福岡

### 1 近年の10a当たり収量の動向

近年の10a当たり収量の動向をみると、収量水準は低めで推移し、下降傾向にある。  
(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄(平成21年産以降)

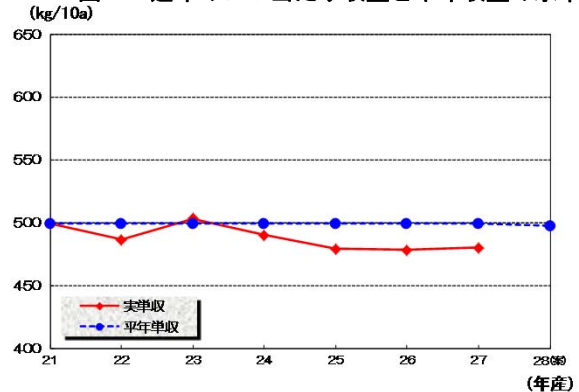
年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)数
21	×	○	—	100
22	×	—	×	97
23	—	—	—	101
24	—	—	×	98
25	—	×	×	96
26	×	—	×	96
27	×	—	×	95

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、—: 平常並み  
 ×: やや不良(やや少ない)、××: 不良(少ない)  
 ただし、被害は、◎: 少ない、○: やや少ない、—: 平常並み  
 ×: やや多い ××: 多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅(福岡は1.80mm)以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

### 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、高温耐性品種で高品質・高収量の「実りつくし」への作付誘導が進められているものの、比較的収量水準の高い「ヒノヒカリ」等が減少し、比較的収量水準の低い「元気つくし」等の作付面積割合が増加する傾向にある。(図2)

図1 近年の10a当たり収量と平年収量水準



福岡	21	22	23	24	25	26	27	28(見込)
実単収	499	486	503	490	479	478	480	
平年単収	499	499	499	499	499	499	499	497
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-2
作況指数	100	97	101	98	96	96	96	

資料: 「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
福岡	499	487	△12	483	486

図2 品種別作付面積割合の動向

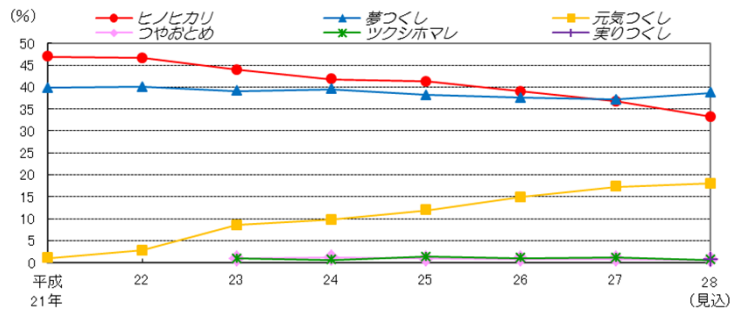


表3 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
ヒノヒカリ	517	43.9	41.8	41.2	39.0	36.7	33.2
夢つくし	477	39.1	39.5	38.2	37.5	37.1	38.7
ヒヨクモチ	545	2.8	2.6	3.2	3.1	3.4	2.8
元気つくし	483	8.5	9.8	11.9	14.9	17.3	18.0
つくしろまん	480	0.9	0.8	0.7	0.7	0.8	0.6
あきさやか	608	0.9	0.5				
つやおとめ	542	0.9	1.1	0.9	0.8	0.8	0.6
コシヒカリ	481	1.1	1.1	1.1	1.0	1.0	1.1
ニシホマレ	562	0.2	0.6				
山田錦	475	0.5	0.5	0.6	0.6	0.7	1.0
ツクシホマレ	552	0.9	0.6	1.3	1.0	1.1	0.6
実りつくし	597						0.6
10a当たり収量試算値の対前年差(kg)		△1.0	△0.5	△1.0	△0.6	△1.2	

資料: 水稲作況調査結果等

注: 1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農業者等の情報から推計した。

### 3 作柄表示地帯別作付面積の動向

作柄表示地帯別作付面積割合の動向をみると、比較的収量水準の高い筑後地帯において平成28年度の作付面積割合が前年度に比べて増加すると見込まれるものの、近年の動向をみると減少傾向にある。

(表4)

表4 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯(地域)名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)					
		24	25	26	27	28 (見込)
福岡	469	16.3	16.4	16.4	16.6	16.4
北東部	474	36.8	37.0	37.4	37.5	35.6
筑後	504	46.9	46.6	46.2	45.9	48.0
10a当たり収量試算値の対前年差(kg)			△ 0.3	△ 0.6	△ 0.1	0.7

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

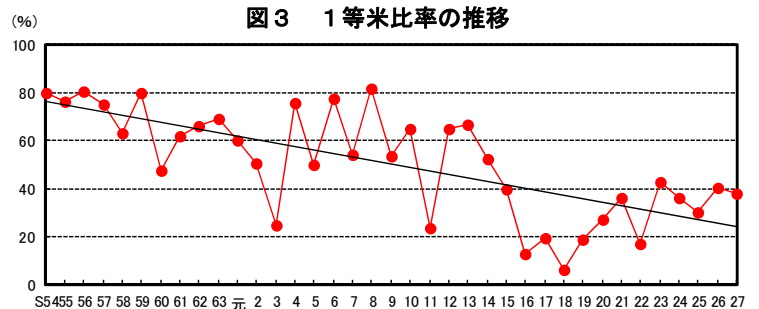
2 平成23年産から24年産にかけて面積階層の移動があったため、24年産からのデータで検証した。

3 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 4 1等米比率の動向

1等米比率の動向をみると、気候の変動に伴い、低下傾向にある。(図3)

図3 1等米比率の推移

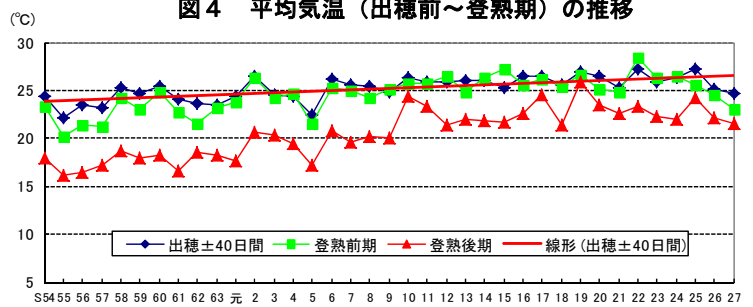


資料：農林水産省調べ

### 5 収量水準の動向

- ①近年の10a当たり収量の動向をみると、水準は低めで推移し、下降傾向にあること、
  - ②品種別作付面積割合をみると、比較的収量水準の高い「ヒノヒカリ」等の作付面積割合が減少傾向にあり、比較的収量水準の低い「元気つくし」等の作付面積割合が増加していること、
- 等から、収量水準は下降傾向にある。

図4 平均気温(出穂前~登熟期)の推移



注：気象庁の公表データを基に作成した。

## 熊本

### 1 近年の10a当たり収量の動向

近年の10a当たり収量の動向をみると、収量水準は低めで推移し、下降傾向にある。

(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄 (平成21年産以降)

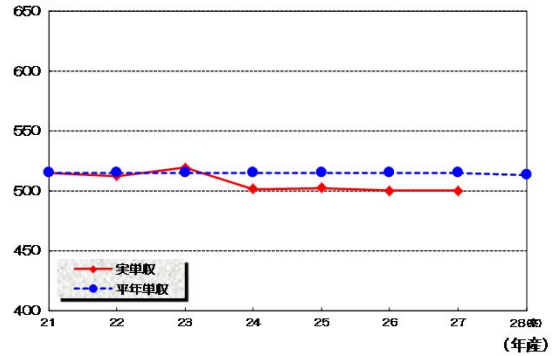
年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	××	◎	○	100
22	×	○	—	99
23	—	○	—	101
24	×	—	×	97
25	—	×	×	97
26	×	—	×	97
27	—	×	×	97

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平常並み  
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平常並み  
 ×：やや多い ××：多い

なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（熊本は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準 (kg/10a)



熊本	21	22	23	24	25	26	27	28(見)
実単収	515	512	519	501	502	500	500	
平年単収	515	515	515	515	515	515	515	513
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-2
作況指数	100	99	101	97	97	97	97	

資料：「作物統計」

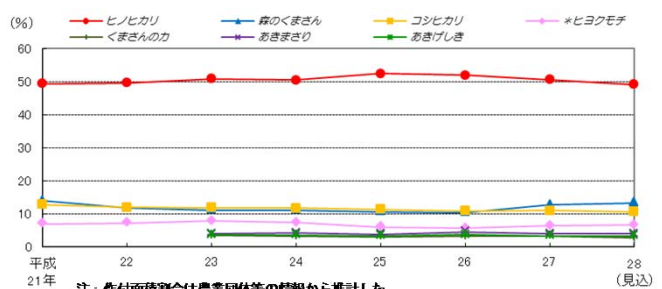
表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
熊本	515	506	△9	501	504

### 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「ヒノヒカリ」の作付割合がおおむね5割を占めている。その他の品種は多少の推移があるものの、大きな変動はみられない。(図2)

図2 品種別作付面積の動向



注：作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 3 栽培技術面からの動向

栽培技術面からの動向をみると、省力化・低コスト化の推進を図るため、疎植栽培及び緩効性肥料（基肥一発肥料）の使用農家が増加傾向にある（平成18年32%→平成28年（見込み）55%）。（図3）

また、疎植栽培の増加による1㎡当たり株数の減少に伴い、千もみ当たり収量の補償作用がみられるものの、1㎡当たり全もみ数は減少傾向にある。（図4及び5）

図3 緩効性肥料の使用割合の動向

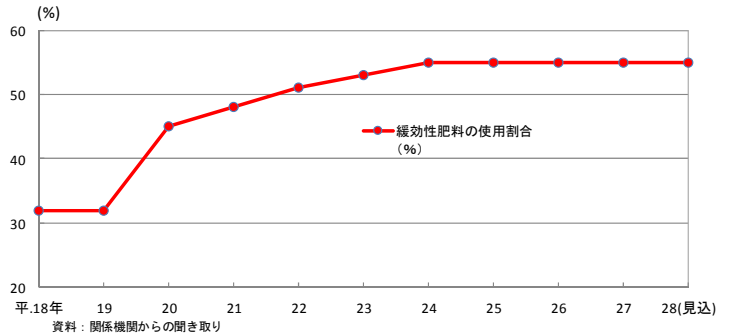


図4 1㎡当たり株数の推移

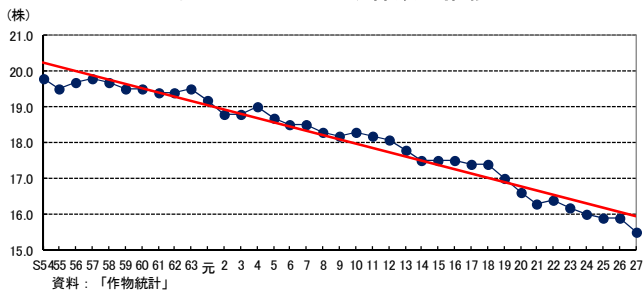
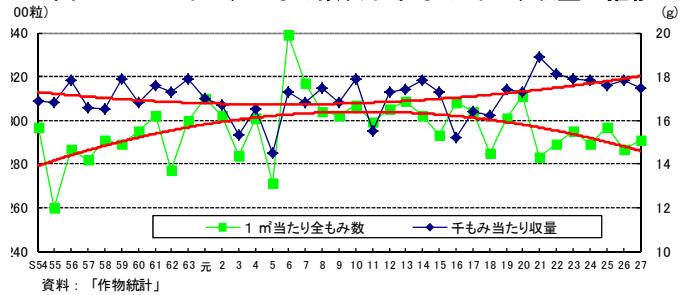


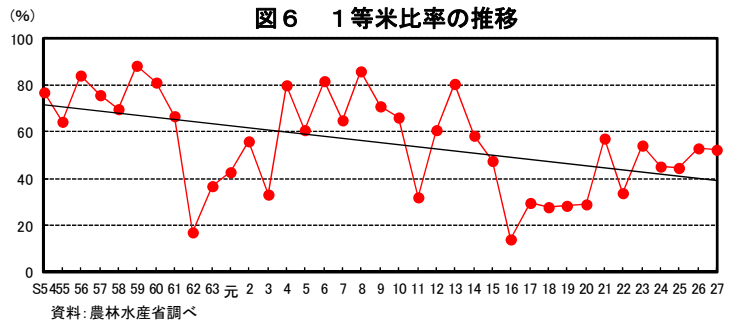
図5 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



### 4 1等米比率の動向

1等米比率の動向をみると、気候の変動に伴い、低下傾向にある。（図6）

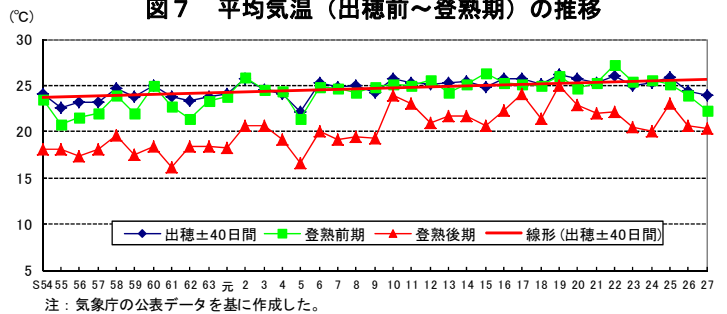
図6 1等米比率の推移



### 5 収量水準の動向

①近年の10 a 当たり収量の動向をみると、水準は低めで推移し、下降傾向にあること、  
②省力化・低コスト化に伴い、疎植栽培が増加傾向にあり、収量水準の低下していること、  
等から、収量水準は下降傾向にある。

図7 平均気温（出穂前～登熟期）の推移



# 大分

## 1 近年の10a当たり収量の動向

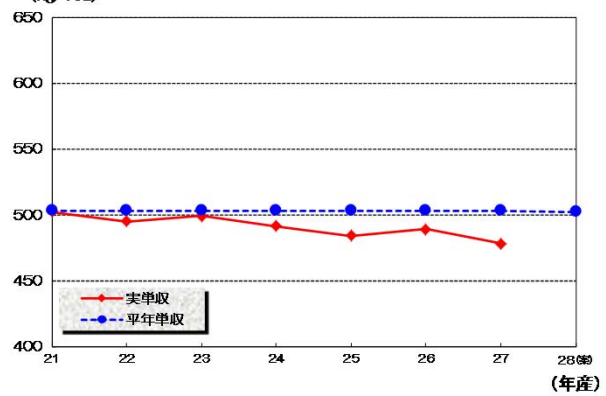
近年の10a当たり収量の動向をみると、収量水準は低めで推移し、下降傾向にある。(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄 (平成21年産以降)

年次	全もみ数	登熟	被害	(作最況終指数)
21	×	○	×	100
22	××	○	×	98
23	○	××	×	99
24	×	○	×	98
25	—	××	×	96
26	—	×	×	97
27	×	×	×	95

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み  
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（大分は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



大分	21	22	23	24	25	26	27	28(案)
実単収	502	495	499	491	484	489	478	
平年単収	503	503	503	503	503	503	503	502
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-1
作況指数	100	98	99	98	96	97	95	

資料：「作物統計」

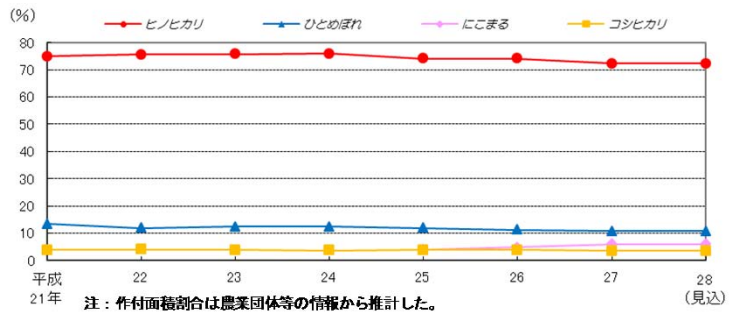
表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
大分	503	492	△ 11	488	488

## 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、高温耐性品種である「にこまる」及び「つや姫」への作付誘導が進められているものの、「ヒノヒカリ」の消費者からの人気は根強く、品種別作付面積割合は、大きな変動はみられない。(図2)

図2 品種別作付面積割合の動向



注：作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

### 3 作柄表示地帯別作付面積の動向

作柄表示地帯別作付面積割合の動向をみると、比較的収量水準の高い北部地帯の作付面積割合が減少傾向にあり、比較的収量水準の低い日田地帯の作付面積割合が増加傾向にある。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
北部	508	30.0	30.2	30.2	29.9	28.9	28.6
湾岸	488	29.3	29.0	29.0	29.0	29.2	29.3
南部	484	28.8	28.9	29.0	29.0	29.4	29.5
日田	478	11.9	11.9	11.8	12.1	12.5	12.6
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.0	0.0	△ 0.1	△ 0.3	△ 0.1

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5年平均である。

2 作付面積割合は農業者等の情報から推計した。

### 4 栽培技術面の動向

栽培技術面の動向をみると、省力化・低コスト化を図る観点から、疎植栽培が増加傾向にあり、これに伴い1㎡当たり株数が減少傾向にあることから、1㎡当たり全もみ数は減少傾向にある。

(図3及び4)

図3 1㎡当たり株数の推移

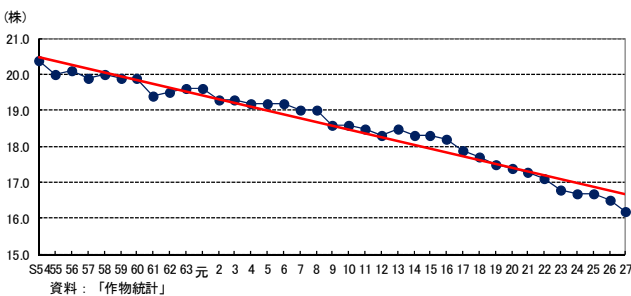
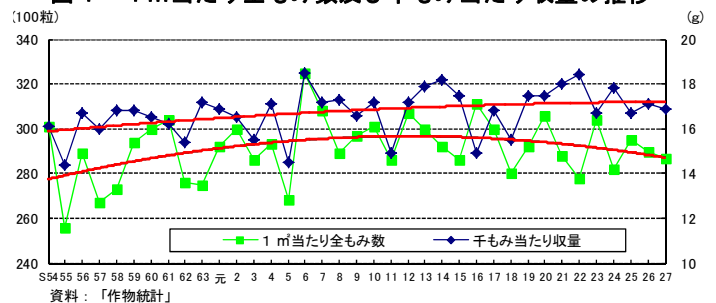


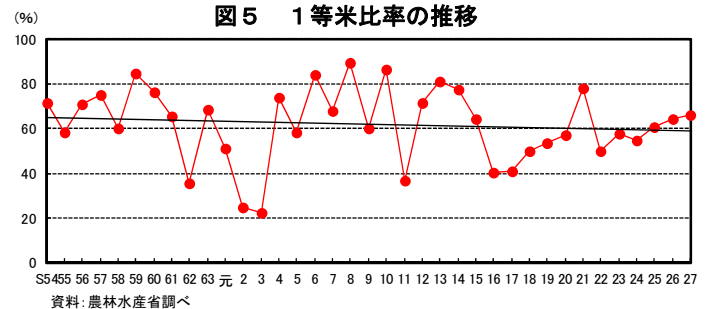
図4 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



### 5 1等米比率の動向

1等米比率の動向をみると、気候の変動に伴い、わずかながら低下傾向にある。（図5）

図5 1等米比率の推移



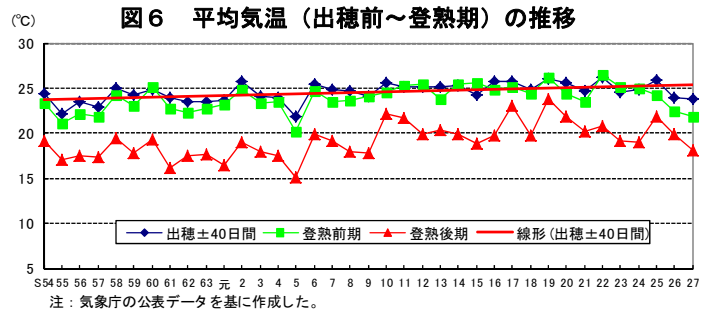
### 6 収量水準の動向

①近年の10a 当たり収量の動向をみると、水準は低めで推移し、下降傾向にあること、

②作柄表示地帯別割合をみると、比較的収量水準の高い北部地帯の作付面積割合が減少傾向にあり、比較的収量水準の低い日田地帯の作付面積割合が増加傾向にあること、

③省力化・低コスト化による疎植栽培が増加傾向にあり、これに伴う1㎡当たり株数の減少により、1㎡当たり全もみ数が減少傾向にあることから、収量水準は下降傾向にある。

図6 平均気温（出穂前～登熟期）の推移





# 宮崎

## 1 近年の10a当たり収量の動向

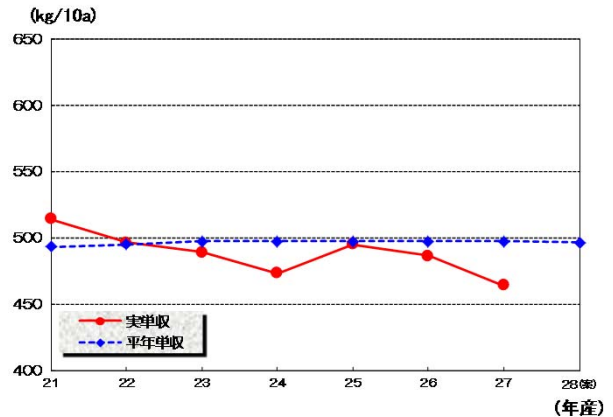
近年の10a当たり収量の動向をみると、低めで推移し、下降傾向にある。  
(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄（平成21年産以降）

年次		全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
21	早期	◎	—	◎	109
	普通期	×	◎	—	101
22	早期	×	○	—	100
	普通期	×	◎	—	100
23	早期	××	◎	×	96
	普通期	—	—	—	100
24	早期	××	◎	×	98
	普通期	××	—	××	93
25	早期	×	—	—	99
	普通期	○	××	—	100
26	早期	—	—	—	102
	普通期	×	—	××	95
27	早期	××	××	××	85
	普通期	—	×	×	98

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み  
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（宮崎は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



宮崎	21	22	23	24	25	26	27	28(案)
実単収	514	496	489	473	495	486	464	
平年単収	493	495	497	497	497	497	497	496
前年差	0	2	2	0	0	0	0	-1
作況指数	104	100	98	95	100	98	93	

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
宮崎	497	488	△9	483	481

## 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、高温耐性品種で高収量の「おてんとそだち」及び「夏の笑み」への作付誘導が進められており、「コシヒカリ」の作付面積割合が減少傾向であるものの、消費者の人气が根強い「ヒノヒカリ」の作付面積割合に大きな変動はみられないことから、総体的には品種別作付面積の変動が収量水準に与える影響は少ない。(図2)

図2 品種別作付面積割合の動向

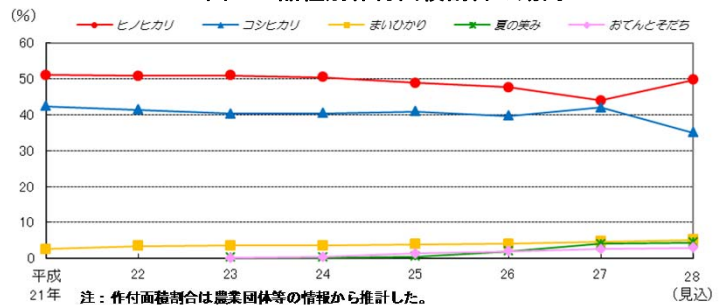


表3 収量水準地帯別作付面積の動向

## 3 収量水準地帯別作付面積の動向

収量水準地帯別作付面積の動向をみると、わずかであるが低収量地帯（早期栽培）の作付面積割合が減少傾向であり、中収量地帯（早期栽培及び普通期栽培）の作付面積割合が増加傾向であるものの、収量水準への影響はほとんどみられない。(表3)

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H23	24	25	26	27	28 (見込)
高収量地帯（普通）	524	25.6	25.6	25.3	25.8	26.0	25.6
中収量地帯（普通）	482	32.8	32.8	32.4	32.1	33.0	33.2
中収量地帯（早期）	483	16.6	16.6	17.3	17.1	16.5	16.8
低収量地帯（早期）	471	25.0	25.0	25.0	24.9	24.5	24.3
10a当たり収量試算値の対前年差(kg)			0.0	△0.1	0.2	0.1	△0.1

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は農業団体等の情報から推計した。

#### 4 栽培技術面からの動向

栽培技術面からの動向をみると、省力化・低コスト化の観点から、緩効性肥料（基肥一発肥料）の使用状況が安定するとともに、疎植栽培が進み、1㎡当たり株数は減少傾向にあり、千もみ当たり収量の補償作用がみられるものの、1㎡当たり全もみ数は減少傾向にある。（図3、4及び5）

図4 1㎡当たり株数の推移

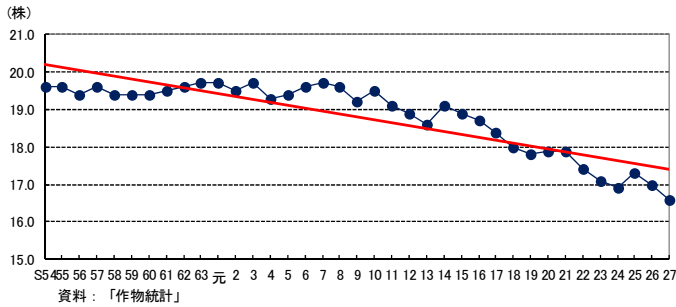


図3 緩効性肥料の使用割合の動向

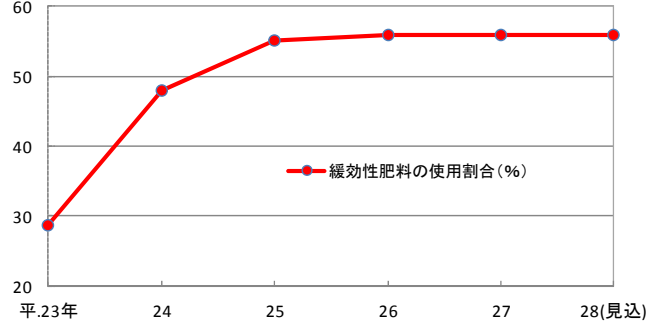
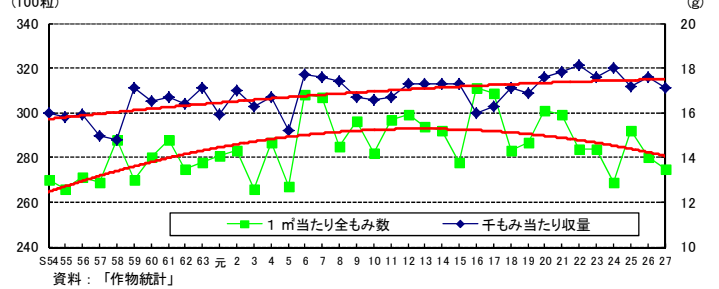


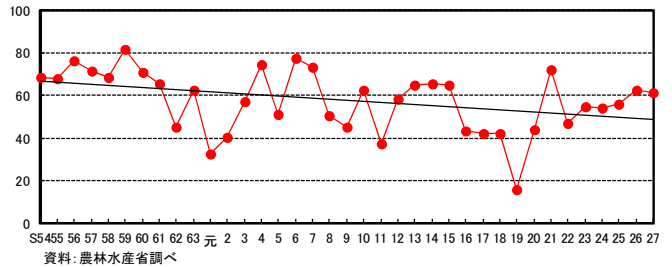
図5 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



#### 5 1等米比率の動向

1等米比率の動向をみると、気候の変動に伴い、低下傾向にある。（図6）

図6 1等米比率の推移



#### 6 収量水準の動向

①近年の10 a 当たり収量の動向をみると、水準は低めで推移し、下降傾向にあること、  
②省力化・低コスト化による疎植栽培が増加傾向にあり、これに伴う1㎡当たり株数の減少により、1㎡当たり全もみ数が減少傾向にあること、  
等から、収量水準は下降傾向にある。

図7 平均気温（出穂前～登熟期）の推移（早期）

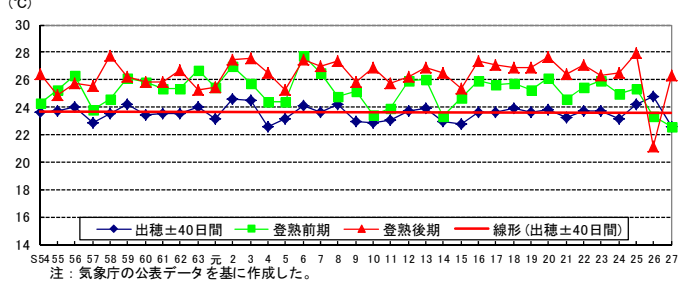
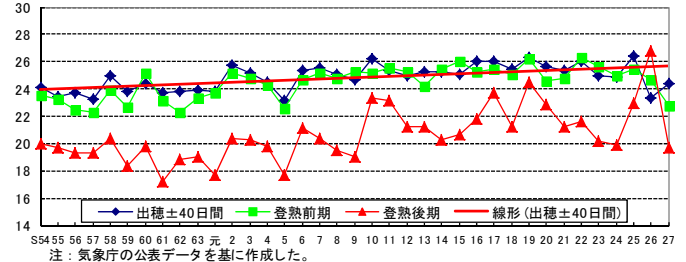


図8 平均気温（出穂前～登熟期）の推移（普通期）



## 鹿児島

### 1 近年の10a 当たり収量の動向

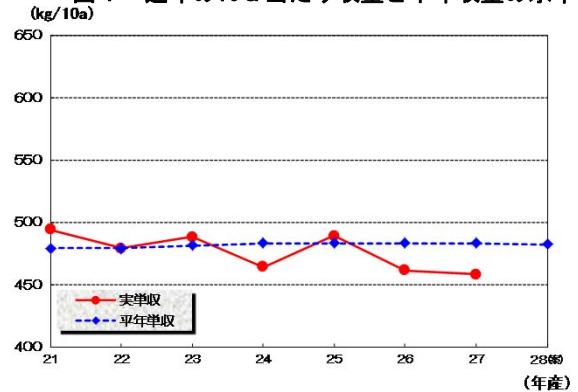
近年の10a 当たり収量の動向をみると、収量は低めで推移し、下降傾向にある。(図1、表1及び2)

表1 最近の作柄(平成21年産以降)

年次		全もみ数	登熟	被害	(作最況終指数)数
21	早期	—	◎	◎	106
	普通期	×	◎	○	102
22	早期	×	○	×	98
	普通期	×	◎	—	100
23	早期	×	◎	×	97
	普通期	×	◎	○	103
24	早期	×	○	×	96
	普通期	×	—	×	96
25	早期	×	◎	○	104
	普通期	—	—	—	100
26	早期	—	○	○	103
	普通期	×	○	×	94
27	早期	×	×	×	88
	普通期	×	○	×	96

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、—：平年並み  
 ×：やや不良(やや少ない)、××：不良(少ない)  
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み  
 ×：やや多い ××：多い  
 なお、平成27年産の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅(鹿児島は1.80mm)以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準



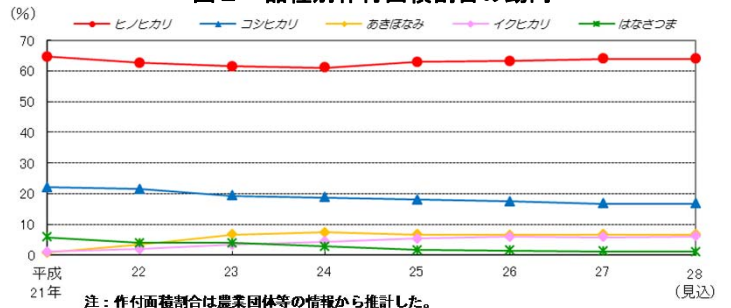
鹿児島	21	22	23	24	25	26	27	28(推)
実単収	494	479	488	464	489	461	458	
平年単収	479	479	481	483	483	483	483	482
前年差	0	0	2	2	0	0	0	-1
作況指数	103	100	101	96	101	95	95	

資料：「作物統計」

表2 平年収量と7中5平均対比等

	27年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
鹿児島	483	476	△7	471	472

図2 品種別作付面積割合の動向



注：作付面積割合は農家団体等の情報から推計した。

### 2 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、高品質・高収量の「イクヒカリ」への作付誘導が進められており、「コシヒカリ」の作付面積割合が減少傾向にあるものの、消費者の人气が根強い「ヒノヒカリ」の作付面積割合の大幅な変動がみられないことから、品種別作付面積割合が収量水準に与える影響は、ほとんどみられない。(図2)

### 3 収量水準地帯別作付面積の動向

比較的収量水準の高い地域の作付面積割合が減少傾向にある。(表2)

このうち、収量水準の高い伊佐始良地帯では、近年、良質米生産のため、化学肥料及び農薬の使用を抑えた伊佐ブランド米の生産を進めており、量から質への転換により収量水準は低下傾向にある。(図3)

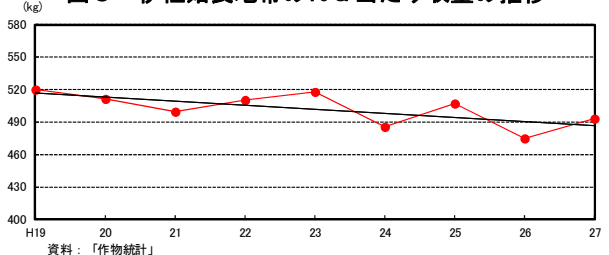
表2 収量水準地帯別作付面積の動向

地帯(地域)名	(参考)10a当たり収量水準(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H23	24	25	26	27	28(見込)
高収量地帯	495	53.3	53.1	53.1	52.9	53.1	52.6
中収量地帯	461	42.2	42.5	42.4	42.6	42.5	42.9
低収量地帯	413	4.5	4.4	4.5	4.5	4.4	4.5
10a 当たり収量試算値の対前年差(kg)				0.0	△0.1	0.1	△0.2

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。  
 2 作付面積割合は農家団体等の情報から推計した。  
 3 高収量地域は出水産地帯及び伊佐始良地帯、中収量地帯は薩摩半島地帯及び大隅半島地帯、低収量地域は熊毛大島地帯をいう。

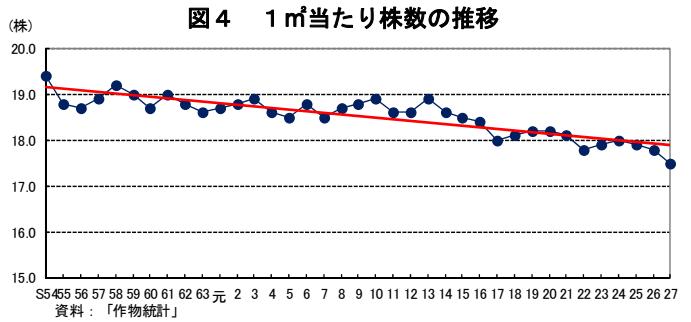
図3 伊佐始良地帯の10a 当たり収量の推移



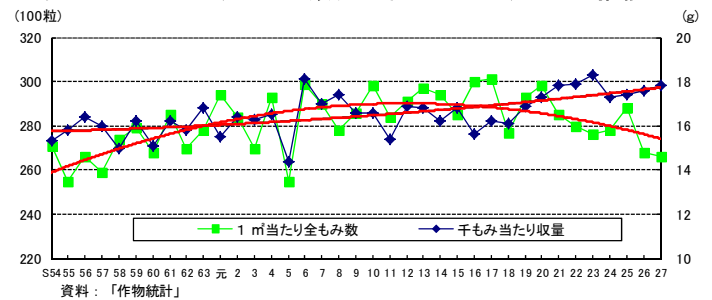
資料：「作物統計」

#### 4 栽培技術面からの動向

栽培技術面からの動向をみると、省力化・低コスト化を図る観点から、疎植栽培が進み、これに伴い、1㎡当たり株数が減少傾向にあることから、千もみ当たり収量の補償作用がみられるものの、1㎡当たり全もみ数は減少傾向にある。(図4及び5)

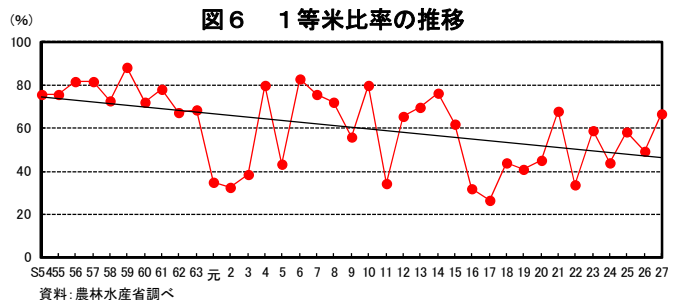


**図5 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移**



#### 5 1等米比率の動向

1等米比率の動向をみると、気候の変動に伴い、低下傾向にある。(図6)



#### 6 収量水準の動向

①近年の10a 当たり収量の動向をみると、水準は低めで推移し、下降傾向にあること、  
②作柄表示地帯別割合をみると、比較的収量水準の高い地帯の作付面積割合が減少傾向であり、このうち、県内一の生産量の伊佐地区で、良質米向上を目指した「伊佐ブランド米」の推進に伴い、収量水準は減収傾向にあること、  
等から、収量水準は下降傾向にある。

**図7 平均気温（出穂前～登熟期）の推移**

